

「核兵器廃絶運動の貢献者」として ノーベル平和賞受賞式に招待されて

ひろしま女性大学同窓会

岡 田 恵 美 子

〈当時8歳、広島市尾長町在住〉

私は、被爆当時は8歳でした。50歳のころ、ワールドフレンドセンターの派遣で、アメリカに行き、バーバラ・レイノルズというアメリカ人女性に出逢いました。彼女は、「戦争は暴力と武力で瞬時に始めることが出来る。平和は一人ひとりが膝を交えて広めていくことだ。これがヒロシマの人間の義務だ」と言いました。この言葉によって、私は語り部として活動を始めたのです。そして翌年、私はひろしま女性大学に応募しました。女性大学では同期の黒瀬禎子さんが、「女性大学の中でも、伝えていかなければ」と励まし背中を押してくれました。

被爆70年の昨年、「核兵器廃絶運動の貢献者」としてノーベル平和賞受賞式に招待されました。授賞式は、ノーベルの命日、12月10日にノルウエーのオスロ市庁舎で国王臨席のもとに行われました。平和賞に決まったチュニジアの「国民対話カルテット」の授賞式の前に、突然「ヒロシマの被爆者エミコ・オカダ、ナガサキのショウヘイ・ツイキ、ケンジ・アベ」とアナウンスされました。全員（1,000人位）が立ち笑顔で拍手の中、只々ありがとうございますと頭を下げました。熱いものが込みあげ涙が流れ、言葉に出来ない感動の時でした。世界中の被爆者が招待されたような気持ちでした。

ノルウエーのアーナ・ソルベルグ首相は、「あなた達の話は、犠牲者の数字の後ろに一人ひとりの人間がいると気づかせてくれる。若い世代もそれを理解することが大切だ。被爆70年の今年に来てくれ感謝している。語り部として伝えてきたことは次世代にも受け継がれ、非常に意味がある」とおっしゃいました。

翌日は、オスロ市内で講演し、オスロ市長のマリアンネ・ボルゲン市長、NGO、一般の親子など100人位の人が参加の中、広島市立基町高校の生徒が書いた絵画と松井一寛広島市長のメッセージ、映画アトミックマムのDVD、私の被爆ストーリーの英文とDVD、小さな折り鶴などをプレゼントしました。そして強烈な爆風、4,000度の熱、放射線被害の話をしました。

ボルゲン市長は「オスロを平和の都市にしたい。核兵器の完全廃絶こそが、世界の取るべき唯一の道だ。広島、長崎への原爆投下は歴史上の汚点だ」と言われました。オスロで一般市民の親子づれが「本当にあったことの、被爆証言か？」と驚いた表情で質問してきました。映像で紹介した帽子、シゲル君の弁当箱。それらはレプリカではなく遺品です。中学生6,300人が亡くなりました。

帰国し、キノコ雲の下であった事を、広島県民全員で広めていきたい、ぜひ平和をつくりだすために立ちあがって、語り続けていただきたいと強く思いました。

* ノルウエーのソルベルグ首相、オスロ市のボルゲン市長ともに女性です。

Special contribution

As a "contributor to the nuclear weapons abolition movement"
Invited to the Nobel Peace Prize award ceremony

Emiko Okada

Hiroshima Women's University Alumni Association

(8 years old at that time, living in Onagacho, Hiroshima City)

I was eight years old at the time of the bombing.

At the age of fifty, I was sent to the World Friend Center to go to the United States and met an American woman named Barbara Reynolds.

She said, "War can be started instantly with violence and force. Peace is the spread of peace with each and every one of us. This is the duty of human beings in Hiroshima."

With these words, I started working as a storyteller.

The following year, I applied for Hiroshima Women's University.

At the women's university, Sadako Kurose, who was in the same period, encouraged her by saying, "I have to tell even in the women's university."

Last year, 70 years after the bombing, she was invited to the Nobel Peace Prize award ceremony as a "contributor to the nuclear weapons abolition movement."

The award ceremony was held on December 10th, the anniversary of Nobel's death, at the Oslo City Hall in Norway in the presence of the King.

Before the award ceremony of the "National Dialogue Quartet", Tunisia, which was awarded the Peace Prize, was suddenly announced as "Hiroshima A-bomb survivors Emiko Okada, Nagasaki Shohei Tsuiki, Kenji Abe".

All (about 1,000 people) stood up and applauded with a smile, and bowed to say thank you for now.

It was a time when hot things came up and tears flowed, and I was so moved that I couldn't put it into words.

I felt like I was invited to A-bomb survivors from all over the world.

Norwegian Prime Minister Erna Solberg said, "Your story reminds us that there is a human being behind the numbers of victims. It is important for the younger generation to understand that. This year, 70 years after the bombing.

I am grateful to you for coming to Norway. What I have conveyed as a narrative is passed down to the next generation and is very meaningful."

The next day, a lecture was given in the city of Oslo, with about 100 people including the

mayor of Oslo, Marianne Borgen, NGO, and general parents and children participating. I gave a message from the mayor, a DVD of the movie Atomic Mom, an English text of my story about the atomic bombing, and a small folding crane.

He talked about a strong blast, 4,000 degrees of heat, and radiation.

Mayor Borgen said, "I want to make Oslo a city of peace. The complete elimination of nuclear weapons is the only way the world should take. The atomic bombings on Hiroshima and Nagasaki are historical blemishes."

In Oslo, parents and children of the general public asked with a surprised expression, "Is it really there, is it a testimony of the atomic bombing?"

The hat introduced in the video, Shigeru's lunch box.

They are relics, not replicas.

6,300 junior high school students have died.

After returning to Japan, I wanted to spread the fact that it was under the mushroom cloud with all the citizens of Hiroshima, and I strongly wanted to stand up and continue talking to create peace.

* Norwegian Prime Minister Solberg and Mayor Borgen of Oslo are both women.

被爆の体験伝えたい 広島岡田さんも出席

Mr. Okada from Hiroshima
also attended

【オスロ共同】10日のノルウェー・オスロでのノール平和賞授賞式には、広島市の岡田孝幸さん(78)と長崎市の築城昭平さん(88)の2人の日本の被爆者が来賓として出席した。日本原水爆被害者団体協議会(被団協)によると、被爆者の出席は初めて。式典後



10日、オスロ市庁舎で、授賞式に臨む(中央列右から)築城さん、岡田さん

2人はノルウェーのソルベルグ首相と約40分間面会、被爆体験を説明した。2人は、被爆者の式典参加をノール平和賞委員会に働き掛けてきた桐蔭横浜大の阿部憲一准教授の付き添いでオスロに9日到着。長旅の疲れも見せず、スーツなどで正装し、平和に関して

世界で最も注目される舞台の授賞式に臨んだ。首相は「被爆70年のことに来てくれ感謝している。語り部として伝えてきたことは次世代にも受け継がれ、非常に意味がある」と2人をねぎらった。首相に促されて体験を語った築城さんは「全体がぼろぼろになり、周りの人は1週間以内にはたばたと死んでいったなど説明。面会後、岡田さんは「子どもが二度と犠牲にならないと伝えることができて良かった」と振り返った。2人は11日にオスロで記者会見する予定。岡田さんは「犠牲者数などのデータではなく、自分の体験を語りたい」、築城さんは「高齢で、いつまでも証言をできるわけではない。今のうちに多くの人に伝えたい」と話した。



宮本澄枝さんが寄稿した呉空襲記録誌

Kure air raid record magazine contributed by Sumie Miyamoto



有本よし江さんの手作りの随想集

A collection of handmade essays by Yoshie Arimoto



竹内チヨさんが広島を世界にと送った紙人形

A paper doll that Chiyo Takeuchi sent the heart of Hiroshima to the world

被爆 70 年に平和の大切さを今一度考える ～ 広島県の男女共同参画をすすめる会

被爆の語り部 沼田鈴子さんの映画会 「アオギリにたくして」

22歳の夏、広島で被爆し左足を失った沼田鈴子さん。焼け焦げたアオギリが新芽を出す姿に励まれ、自殺を思いとどまり、やがて原爆記録映画への登場をきっかけに、証言活動をはじめられたそうです。今年には被爆70年に当たります。広島県の男女共同参画をすすめる会では、今一度平和の大切さを考える機会をもつために、総会に合わせて標記の映画会を企画しました。会員の皆さままでお誘いあわせのうえ、ご参加ください。

◆日時：平成27年5月23日(土)

13時00分～15時00分

◆場所：エソール広島 広島市中区富士見町11-6 ☎082-242-5252

◆上映協賛金：500円 ◆定員：250名



沼田さんと、企画・製作・統括プロデューサーの中村望美さん

「アオギリにたくして」は、アオギリの語り部と呼ばれ、広島平和記念公園の被爆アオギリの木の下でたくさんの人々に被爆体験を語り感銘を与えてきた被爆者・故沼田鈴子さんをモデルに作られました。広島平和記念公園にある被爆アオギリは、爆心地から1.3kmにあった広島通信局の中庭で被爆しました。熱線と爆風を受けた爆心地側の幹半分は、焼けてえぐられていましたが、樹皮が傷口を包むように成長し、芽を吹きました。アオギリの小さな芽は、70年は草木も生えないと言われた広島で、たくさんの人々を勇気づけたといえます。1973年に平和公園に移植された被爆アオギリは、今も元気に平和公園を訪れる人々を迎え「平和の尊さ」と「いのちの大切さ」を伝えてくれています。

【主催】 広島県の男女共同参画をすすめる会 会長 井上佐智子
【共催】 公益財団法人広島県男女共同参画財団
【問合せ】 携帯 090-9463-0338 e-mail luckey@network.email.ne.jp

「被爆70年記念事業」沼田鈴子さんの映画
「アオギリに託して」上映会のちらし

"70th anniversary of the atomic bombing" Flyer for the screening of Suzuko Numata's movie "Entrust to Aogiri"





原爆ドームと洗濯物を抱える女性 1948年(昭和23年)〔撮影：佐々木雄一郎／提供：塩浦雄悟〕
川で洗濯するために、洗い桶を抱えた女性が元安川右岸を歩いていく。

Atomic Bomb Dome and a woman holding laundries 1948

A woman carrying a washing tub walks along the right bank of the Motoyasu River to wash clothes in the river.

A scene of A-bombed Kanayama-cho October 1945

A view from the south at the roof of building in Yamaguchi-cho area (now called Kanayama-cho). Ninoshima (Aki-no-Kofuji), which shouldn't be seen, was observed.



被爆後の風景 1945年(昭和20年)10月 銀山町

〔撮影：米軍／提供：広島平和記念資料館〕

山口町(現銀山町)付近の建物の屋上から南を望む。向こうには見えるはずのない似島(安芸の小富士)が見えた。



仕事に励むお母さん 1952年(昭和27年) 平和大通り

〔撮影：明田弘司／提供：NPO法人広島写真保存活用の会〕

造成中の平和大通りで仕事に励むお母さんたち。この造成工事には、多くの婦人労働力が活躍した。

Mothers working hard on Peace Boulevard, which is under construction. A large number of female workers played an active role in this construction work.

「被爆70年、戦後70年記念事業」昭和20年(1945年)の私

記念誌編集委員長

田 中 祝

「昭和20年(1945年)の私」の手記募集には県内の女性やすすめる会の会員から、40余編が寄せられました。それぞれの暮らしを大きく変えたあの状況の中を、よくも生きてこられたものと、深い感動と驚き、涙なくしては読むことのできない体験や戦後の力一ぱい踏ん張る生き方の手記ばかりでした。犠牲となられた多くの方々に鎮魂の祈りを捧げるとともに、改めて平和の大切さを考えさせられ、人間の生命力の不思議さ、意思の強さに背中を押され、大きな勇気をいただきました。

こういう時代があったこと、その極限の中を強く、たくましく、したたかに生きた女性の姿を風化させることなく、女性の歴史として、多くの方々（特に若い人々）に読み継いでいただくことを願ってやみません。

編集に当たっては、すすめる会の役員を中心に、若い人たちの協力を得て、楽しく和気あいあいの雰囲気の中で進められたことは素晴らしいことでした。

皆様のご協力に心から感謝申し上げます。

編集委員



(上段左から) 湊谷文野 村上直子 坂東素子 長妻玲子 平野節子
(下段左から) 廿日出富貴子 田中 祝 井上佐智子 宮本幸子

— 被爆70年、戦後70年記念誌 — 昭和20年(1945年)の私

発行年月日 平成28年3月
編集・発行 広島県の男女共同参画をすすめる会
〒730-0043
広島市中区富士見町11-6 エソール広島内
事務局 082-242-5262

Editor's Note

「70th anniversary events of the war and radiation exposure」 My life in 1945

Memorial magazine chief editor
Iwai Tanaka

More than 40 essays were sent by women in Hiroshima and the members of the bureau after we solicited them about the theme, "My life in 1945". I was deeply impressed and surprised at the fact that the writers could live on under the circumstances of significant changes of lifestyles after the war. I couldn't read them without tears. They reminded me of the importance of peace and the mysteries of humans' survival power. And I got great courage.

For the record of women history, I keep wishing that a lot of people, especially young ones, read and pass the essays down without forgetting how strong and determined the women in the devastating age were.

It was hilarious that I could edit this magazine with the bureau members playing the center role along with young people in joyful and harmonious atmosphere.

I appreciate all of you for your cooperation from the bottom of my heart.

Editorial bureau members



Fumino Minatoya, Naoko Murakami, Motoko Bando, Reiko Nagatsuma, Setuko Hirano,
Fukiko Hatsukade, Iwai Tanaka, Sachiko Inoue, Sachiko Miyamoto

– The 70th anniversary memorial magazine of the war and radiation exposure –

My Life in 1945

Date of issue : March 2016
Editor and publisher : The bureau of Hiroshima recommending gender equality
C/O Essor Hiroshima, 11-6 Fujimi-cho, Naka-ku,
Hiroshima 730-0043
Phone: 082-242-5262

編 集 後 記

2016(平成28)年に「～被爆70年、戦後70年記念事業～昭和20年(1945年)の私」を出版して7年がたちます。英訳の企画ができたのは、本が出来上がってすぐにサンフランシスコ在住の女性事業家の智子・リップさんが「このような女性たちの苦難の記録はぜひ英訳し、世界の人々に読んでもらいたい。私が、アメリカ在住の仲間たちの協力も得るから、是非実行に移しましょう!」という後押しと協力があり、日本ではリップさんの仲間の豊田梨佐さん、そして広島県の男女共同参画をすすめる会のこの事業への温かい理解を示してくださったボランティアの皆さんのお力でした。

昭和20年(1945年)の時代を生きた女性たちの出発は、苦難の出発でありながら、次の次の世代である小さな人たち(孫やひ孫のひとたち)に残したい大切なこと、それは日常という普通の暮らしの中で小さな喜びを感じる暮らしがとても大切なことで、それこそが幸せだと伝えてくださった気がします。

英訳版出版までの間に世界では2019年(令和元年)末から3年間にわたる新型コロナウイルスの感染拡大防止のための生活上の規制と、2022(令和4)年に始まったロシアのウクライナ侵略戦争が勃発しました。改めて平和とは創り出すもの、そして不断の努力が必要ということに気づかされました。

「昭和20年(1945年)の私」に様々な思いを込めて気持ちを綴ってくださった皆さん、改めてお礼申し上げます。

井上佐智子

総編集委員

吉村 幸子 井上佐智子 西中 陽子 鈴木 千穂

|||||

—被爆70年、戦後70年記念誌—

昭和20年(1945年)の私【日本語版・英訳版】

発行年月日 令和5年8月
編集・発行 広島県の男女共同参画をすすめる会
〒730-0051 広島市中区大手町一丁目2-1
おりづるタワー10階 エソール広島

当会に無断での記事のコピー・転載はご遠慮ください。

|||||

Editor's Note

Seven years have passed since the publication of “~70 years after the dropping the atomic bomb and the end of the war~ me in 1945” in 2016. We managed to translate the book from Japanese into English thanks to Ms. Tomoko Rip who live in San Francisco and is a female entrepreneur.

She decided to support us to complete this translation plan as soon as the book was published and said “I hope this kind of the record of women’s hardships to be translated into English and be known by people all over the world. I will ask my friends to cooperate with this project. So, let’s put into action.”.

Additionally, in Japan, Ms. Risa Toyota who is her friend and volunteers who are on The Gender Equality Association in Hiroshima and understand the significance of this plan also supported this translation project.

Women who lived 1945 had a rough life. However, it seems to me that they had something important to pass on to later generations including grandchildren and great-grandchildren, and I believe they thought that was what made them happy.

For three years until the English version published, Lifestyle restrictions were implemented to prevent the spread of COVID-19 and Russia will invade Ukraine in 2022. I have realized that constant effort is required to achieve a state of peace. I really appreciate everyone who wrote their feelings with many wishes in “~70 years after the dropping the atomic bomb and the end of the war~ me in 1945”.

Sachiko Inoue

General editorial committee

Sachiko Yoshimura, Sachiko Inoue, Yoko Nishinaka, Chiho Suzuki

=====

– The 70th anniversary memorial magazine of the war and radiation exposure –
My Life in 1945 Date of issue (Japanese version / English translation version)

Publication date : August 2023 Edited and published by
Association for the Promotion of Gender Equality in Hiroshima Prefecture
1-2-1 Otemachi, Naka-ku, Hiroshima 730-0051
Orizuru Tower 10F Esor Hiroshima

Please refrain from copying or reprinting articles without our permission.

=====



「昭和20年の私」出版時にインタビューを受ける田中祝さん

Ms. Tanaka being interviewed at the time of publication of "My Memories of 1945".



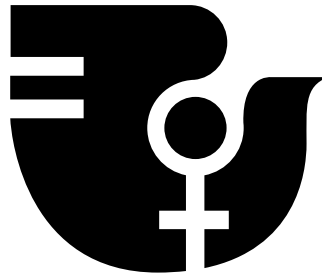
2017.09.16 女性の起業や英訳出版の意義を、
智子リップさんにお話しいただきました。

September 16, 2017 Ms. Tomoko Rip talked about the significance of women's entrepreneurship and English translation publication.



2017.09.16 サンフランシスコから日本に帰郷された、智子リップさんをお招きして。講演会開催後の交流会で、記念撮影 (富士見町のエソール広島で)

September 16, 2017 We invited Tomoko Rip, who returned to Japan from San Francisco. Commemorative photo at the networking event after the lecture (at Esol Hiroshima in Fujimi-cho)



平等・開発・平和